鳳凰の由來について

出石誠彦

一　古記錄に現はれた鳳凰の性質。
二　鳳凰の由來に關する從來の諸說の批判。
三　その形態及びその由來に對する鄙見。

一

上代支那の說話の解明を試みようと期してゐる私にとつては、所謂四靈、卽ち龍、龜、麟、鳳なるものは重要な意義ある、併しながら極めて至難な問題であつた。そして、徐ろに微力をその考察に致してゐる內、おぼろげながら鄙見が纏つて來たのでその都度「龍の由來について」[1]をものし、ついで「麒麟について」[2]の考察を陳じた私は玆に試みに鳳凰に對しても未熟ながら所信を述べて見ようと思ふ。而して、此の小篇の企圖するところは主として鳳凰の由來が如何なるものであるかを明かにしようとするのであつて、前の二篇の姉妹篇を爲すのである。なほ、いふまでもない事ながら鄙見の隨所に見出される考察の不備は、今後硏究を進め得る度每に補正することを期すると共に、特に大方の示敎を得て完璧を期したく思ふのである。

先づ最初に支那上代の諸記錄に鳳凰が如何なるものとせられてゐるかを考へてみると、それは槪ね祥瑞の一つとして取扱はれてゐ、それが鳳凰の最も著るしい性質とせられてゐる。

併し、詩經の大雅生民篇に

鳳凰于飛、翽翽其羽、亦集爰止、藹藹王多吉士、
維君子使、媚于天子、
鳳凰于飛、翽翽其羽、亦傳于天、藹藹王多吉人、
維君子命、媚于庶人、

鳳凰鳴矣、于彼高岡、梧桐生矣、于彼朝陽、
菶菶萋萋、雝雝喈喈、

とある如き、或は書經の益稷にある「簫韶九成、鳳凰來儀」の如き、更に左傳莊公二十二年の條に「春陳人殺二其大子御寇一陳公子完與顓孫奔齊」とある後に「初懿氏卜妻敬仲、其妻占之曰吉、是謂鳳皇于飛、和鳴鏘鏘、有媯之後將育于姜五世、其昌竝于正卿」とある如き鳳凰は明瞭に祥瑞とは云ひ難いのであつて、たゞ普通ならぬ立派な鳥といふ程の意味に過ぎない。故にこれらは鳳凰が單に普通にない立派な鳥、珍らしく美しい鳥とせられて明確なる祥瑞に至る前の階程を示すものと考ふべきであらう。然るに、戰國の末から漢代に至るにつれ祥瑞の思想は漸く結成するに至つたので、漢代の記錄になると、鳳凰は明瞭に祥瑞とせられてゐる。卽ち淮南子の覽冥訓には「昔者黃帝治天下而力牧太山稽輔之……鳳凰翔於庭、麒麟游於郊」とか、「鳳凰之翔至德也、雷霆不作、風雨不興、云々」とかとあるし、史記の五帝本紀に「四海之內咸戴帝舜之功、于是禹乃興九招之樂、致異物、鳳皇來翔、天下明德皆自虞帝始」と言つてあり、新序の雜事篇には「堯舜之誠、感於萬國、動於天地、——中略——鳳麟翔舞下、及微物咸得其所」とある。又た新語の明誠には「周公躬行禮義、郊祀后稷、……臻麟鳳、草木綠化而應」ともある。而してその性質上、緯書にはかゝる記述が極めて豐富であつて、例へば、尙書中侯には「黃帝時天氣休通五行期化、鳳凰巢阿閣讙於樹」、「周公歸政于成王、太平制禮鸞鳳見」と言つてあり、春秋緯などにも、「黃帝坐于扈閑、鳳皇銜書致帝前、其中得五始之文焉」とある。やゝ時代の降つた述異記(卷上)の中にも「堯爲仁君、一日十瑞宮中芻化爲禾、鳳凰止於庭」などゝいふ句が見出される。

なほ正史の本紀の中にも此の種の記事の豐かに存するのはいふまでもないことであるが、玆には煩瑣

に陷るのを避けて、漢書の中の二三の事例を擧示して置くに止める。卽ち、漢書の昭帝本紀始元三年の條に「冬十月鳳凰集東海、遣使者祠其處」、宣帝本紀本始元年の條に「夏五月鳳凰集膠東千乘赦天下、賜吏二千石」、四年五月の條に「鳳皇集北海」、地節二年の條に「夏四月鳳凰集魯郡…大赦天下」、元康元年の條に「三月詔曰廼者鳳凰集泰山、陳留甘露降（下略）」、その他神爵二年正月の條[3]、四年春二月及び冬十一月の條[4]、五鳳三年三月辛丑[5]の條、甘露三年春二月[6]の條等にも祥瑞の記述として鳳凰の事が現はれてゐる。更に後世の記錄に至つては殆んど枚擧に遑がないばかりであるが、念の爲め後漢書その他に於ける顯著な事例の所在を擧げれば、後漢書、光武本紀建武十七年冬十月[7]、章帝本紀元和二年[8]、安帝本紀延光三年春二月、同冬十月[9]、桓帝本紀建和元年十一月[10]、靈帝本紀光和四年秋七月[11]などがあり、三國志の隨所[12]に、又た晉書[13]以下にも相當豐富にその記事を見出だすのであつて、一々こゝに記載するの煩に堪へぬばかりである。かゝる例證によつて鳳凰なるものが古から瑞鳥とされ、祥瑞とされてゐたといふ事は明瞭であつて疑ふ餘地はないであらう。

かくて祥瑞は概ね仁君の聖政に當つて現はれるものであるから、その聯想から鳳凰は仁鳥とせられた場合もあつたやうに思はれ、轉じて仁君は生成を愛で、殺伐を惡むことを本質とせられてゐるところから、此の鳥にもその屬性が附加されるに至つたやうである。その思想的展開の過程は次の如き記錄によつて推考し得るのである。卽ち、易林にある「鳳凰在左、麒麟處右、仁聖相遇」とあることから鳳凰が仁鳥とせられることのあつたことが推知せられ、汲冢周書王會解の「鳳凰者戴仁抱義掖信歸有德」とあるのからも思ひ當たるところがあるので、仁性を有する鳥とせられた事もあるといふ事がほゞ推定せられる。且つ、荀子、哀公篇に「其政好生而惡殺焉、

是以鳳在列樹」とあるのは、尙書大傳にある「舜好生惡殺、鳳凰巢其樹」と同樣な思想であり、淮南子の本經訓や孔子家語などには「覆巢毀卵則鳳凰不翔其邑」とあつてやはり殺伐を惡む思想が表はされてゐる。然るに帝王世紀に見えるとして傳へられてゐるところは「有大鳥……其狀如鶴備五色」とある、恐らく鳳を意味するものと推定される鳥について「不食生蟲、不履生草」といふ屬性が擧げてある。いふ迄もなく、これらの推定は今日に遺存する極めて僅小な斷片的な史料より推量するのであるから、思はぬ過誤に陷つてゐる場合もあるであらうが、私は種々の方面、殊に麒麟の場合と併せ考へて以上の考察は許され得ると信ずるのである。

若し、瑞鳥とせられた鳳が上に述べ來つた如くに漸次發達してその屬性を豐かにして行つたとするならば、やゝこれと類似した羽族は存するものゝ、かく豐富にして崇高い性質を附與せられたものは他に對比すべきものがないのであるから、それが羽族の長であるとする思想に發達するのは當然であり、更に鳳凰に關して多く傳へられてゐる「群鳥從之」といふ事は、羽族の長と考へられたところから展開し來つたものに相違ないと思ふ。その事實は次のやうな史料から推考した結果なのである。卽ち大戴禮の易本命には明かに「有羽之蟲三百六十、而鳳皇爲之長」と記されて居り、禽經には「鳥之屬三百六十、鳳爲之長」と言つてあり、やゝ形を異にしては埤雅に「鳳神鳥也、俗呼鳥王、夫文凡鳥爲鳳、鳳摠衆鳥者也」とある。かく鳥の王者と考へられるに至ると、帝王が百僚を統率するやうに又た衆鳥を從へるとせられるに至るので、說文には「群鳥從以萬數」と言はれて居り、漢書昭帝本紀「地節二年夏四月、鳳凰集魯郡、群鳥從之」、「神爵二年春二月詔曰：鳳凰：集京師、群鳥從以萬數」、甘露三年春二月詔の如きは「鳳皇集新蔡、群鳥四面行列、皆鳳皇立以萬數」とある。後漢

書には靈帝本紀に「光和四年秋七月河南言、鳳皇見新城、群鳥從之」[14]とあるが、この種の事例は宋書や周書[15]などにも現はれてゐる。

なほ鳳凰に關して種々の記錄に散見するところを綜合すると、第一にこれが梧桐竹實と關係づけられてゐること、第二に高く飛昇するものとせられてゐること、第三に種々の鳥獸の形態が附加されてゐることなどが注意されるが、第三の形態に就いての事は後にその條で述べることゝして、こゝには上の二點の論證を試みようと思ふ。前に揭げた詩經の生民篇の句に「鳳凰鳴矣、于彼高岡、梧桐生矣、于彼朝陽」とあつて、古から既に鳳凰が梧桐と關係づけられてゐたことを示してゐ、その箋には「鳳凰之性非梧桐不棲、非竹實不食」とある。說苑の辨物篇の內には「於是鳳乃遂集東囿、食帝竹實、棲帝梧桐」とあるし、やゝ後世のものではあるが魏書の彭城王勰傳に「鳳皇非梧桐不棲、非竹實不食」などゝあつて、

鳳凰が梧桐竹實と結びつけられた事は明瞭な事實である。なほ莊子の秋水篇にある鵷雛は古來「鸞鳳之屬」と注されてゐるから念のためにこゝに擧げると「莊子往見之曰、南方有鳥、其名鵷雛、子知之乎、夫鵷雛發南海而飛北海、非梧桐不止、非練實不食、非醴泉不飮(下略)」とあつて、やはり梧桐竹實(練實)のことが現はれてゐる。このやうな後世の記述は、詩經に記されたところを單に傳承したものに過ぎないであらうと考へられるけれども、然もその由來を推知しようとするに至つては中々困難なことである。たゞ想像を試みるならば、梧桐の極めて生成の著るしい性質が瑞鳥たる鳳と結びつけられ易いものであり、又た普通に出來ない珍らしいものである竹實が、稀に現はれるものと考へられたこの鳥に關係づけられたものではあるまいかと考へられる。次に楚辭の九辨に「鳳愈飄翔而高擧」とあるのや、淮南子の說林訓に「鳳凰高翔千仞之上、故莫之能致」とあ

ることであつて、同様の思想は戰國策の中に「宋玉對王問曰、鳳凰上擊九千里云々」とあるが、この高く飛昇するといふ屬性は、飛昇を本性とする羽族の代表的なものであるとせられたところから發達し來つた思想であらう。

更にこゝに西王母と鳳との關係を一瞥して見ると、拾遺記に周穆王三十六年に鳳腦之燈を用ゐた事のあるところに「西王母乘翠鳳之輦而來」とあり、「方丈山山西有照石」とある後に昭王「與西王母常遊居此臺上、常有衆鸞鳳鼓舞」などゝある。又た漢武內傳には「西王母曰仙之上藥、有九色鳳腦、次有蒙山白鳳之脯」とある。これはその性質が極めて複雜に發達した西王母のことであるから、陽鳥である鳳が結びつけられたのであらうと考へて何等の不審もないであらうが、然もなほ西王母は鳥[16]と關係づけられる性質があるやうに思はれる。といふのは山海經の海內北經には、三青鳥が西王母に使役されるものとせられて居り、司馬相如の大人賦には「吾乃觀西王母、皜然白首、戴勝而穴處、有三足烏爲之使」などゝあるのがそれである。勿論かやうな事の根柢に、仙人は飛揚するものであるとの觀念から、鳥と結びつける思想の存したことはいふまでもないのである。かやうな事に本づく聯想が鳳の西王母と關係づけられるに至つた理由であらうといふことは强ち意味のない想像ではないであらう。

二

上に聊か考察を試み來つた所に據つて、鳳凰が瑞鳥とせられ、ついで又た仁鳥と考へられたところから、生を好み殺を惡むといふやうな性質が附加せられ、その特殊な鳥は終に羽族の長として衆鳥を從はしむるに至り、轉じては梧桐竹實と關係づけられ、高く飛昇するといふことにもなつた事實がほゞ知られるに至つた。

こゝに於いて當然考究を要するのは、かゝる鳳凰とは何に由來するものであるか、何と考へられてゐたかといふ重要な問題であるが、それには先づ此の事に就いて從來如何なる說が存するかを考へてみねばならない。そこで說の當否は暫く措いて、かゝる問題に對して大膽な意見を述べる泰西の東洋學者の間に提示されてゐる說はないかといふと、J. LEGGE 氏は書經の英譯[17]の內に前に引いたところを

"When the nine parts of the service according to emperor's arrangements have all been performed, the male and female phoenix come with their measured gambollings into the court"

と譯してゐるから、鳳凰を phoenix と認めたのである。E. CHAVANNES 氏も亦たその名著佛語譯の史記 "Les mémoires historique de Se-Ma Ts'ien" の內に五帝本紀にある鳳皇來翔の條を

"Alors Yu mit en honneur la musique de neuf reprises, il fit accourir les êtres étranges; le phénix mâle et le phénix femelle vinrent en volant"

と前と同樣に譯してゐるに過ぎない。最近のものでは章鴻釗氏が三靈解に於いて音の類似を說いて「西方古有神鳥曰腓尼克斯」[19]とこれと同樣の說を爲してゐる。これらは鳳凰を phoenix とした例である。然るに A. FORKE 氏が Mitteilungen des Seminars für orientalische Sprachen. 1904 誌上で公にした Mu Wang und die Königen von Sabu[21] の內に鳳の古字は鵬であつて、riesen Vogel を意味し、これは Phönix と關係があると共に Strauss (駝鳥) にも由來があるに相違ないと論じて居られるのである。これは前のものと同じく Phönix とふことも注意すべきであるが、駝鳥とふことも一應考慮すべき問題となる。次に私は H. A. GILES 氏が Adversaria Sinica の中にものした "Who was Si Wang Mu"

なる論説に説く所のものを擧げたいと思ふ。卽ち氏は A. Newton 教授の説いた如くに、鳳は peacock 殊に印度本地に產する *Pavo Cristatus* を見たことのある或る藝術家が作爲したもので、本來は實在の鳥類がいつしか種々の屬性を增して行つたものであらうとの意を縷述[21]して居られる。

於是、これら諸説に對する私考を聊か述べるに當つて、先づ鳳凰を西方の神鳥 Phoenix に比定することは果して當を得たものであるか否かを考へて見ねばならぬ。それを考へるためには、古代西方の傳説に現はれたこの鳥の性質を考へて見ねばならないから、それを概括すると Phoenix は五百年間生きてゐて、自ら身を焚いて死し、その體から一羽の若い Phoenix が生れ出て成長するので Tacitus によると「ポーラス、フェビアス (Paulus Fabius) の世に、Phoenix といふ名で世に知られてゐた神鳥が幾世紀も姿を見せなかつた後に埃及を訪れた。此の鳥が飛揚すると、一群れの種々な鳥が附き添ひ、それは皆物珍らしさに引きつけられ、かゝる美麗な鳥の出現に驚いて見とれてゐるのであつた[22]」とある、といふので、これは西方に神鳥があつてそれは Phoenix といふものであつた、支那にも神聖視された鳥があつて鳳凰と名づけれてゐた。そこで恐らくは鳳が西方の影響によつて現はれたのであらうといふ程度の極めて漠然たる推測であつて、これだけの理由で直ちにこの兩者は關係ありと決定してしまふ事は出來ない。私はたゞ Phoenix に關して説かれてゐるその性質の中に就いて、「この神鳥が飛ぶ時には一群の種種な鳥が附き添ふ」と云はれてゐる點が鳳について「群鳥從之」などゝあるのと著るしい類似があると思ふ。卽ち前に揭げた説文や漢書にあるのが顯著なその事例である。故に單に鳳凰のみについて西方影響の有無を斷じようと試みるならば、此の點は明かに西方からの影響として本來有した性質であらうと推

斷し勝であらう。併し、支那に於いてはかやうな表現をするのは必ずしも鳳凰に限らない事を併せ考へねばなるまい。卽ちこれと同樣の事は龍の場合にも亦た麒麟の場合にも存するのであつてその一例を示すならば、南史梁本紀の「承聖三年、梁江陵城壕中有龍騰、出煥爛五色躍入雲、六七小龍相隨」の如き、舊唐書五行志の「元和七年十一月、龍州武安川會田中嘉禾生、有麟食之、復麟之來一鹿引之、群鹿隨之」の如き記述がその顯著な例で、これは衆蟲の王、衆獸の長とせられた事から現はれて來る當然な結果で明瞭に支那の思想とすべきであるから、鳳の場合もこれらの事例と等しいので、他に西方影響と認むべき根本的な理由が無い以上これを支那の思想としてよからうと思ふのである。私はかく考へて鳳凰の由來が Phoenix にあるとする說には贊成し難いのである。なほ、前に Forke 氏が大鳥といふことに注意して鳳凰の由來に駝鳥の影響の分子があると論ぜられたことを述べて置いたが、それについては殊更考慮を拂ふ要もあるまいと思ふからその事はこゝには省略に從ふ。

かくて、こゝに是非 H. A. Giles 氏が、鳳凰を Peacock に比定せられた說に對して鄙見を述ぶべきことゝなつたが、私の考究の結果もそれとその軌を一にして、Peacock は鳳凰の由來に重要な分子を爲してゐるに相違ないことゝ斷ぜられるのである。併しその結論に達する過程は Giles 氏の所說とは全くその趣を異にするのであるから、次にその問題の考定に必要な鳳凰の形態について一應考究を試み、然る後にその事に論及することゝしよう。

三

於是前に後述することゝした形態に關する記事を聊か調べてみると、說文の鳳の條にはその形態として「麎前鹿後、蛇頸魚尾、龍文龜背、燕頷鷄喙」といふ

事が述べてあり、山海經の南山經には「有鳥曰鳳凰、首文曰德、翼文曰義、背文曰禮、膺文曰仁、腹文曰信」とあり、海内經には「鳳鳥首文曰德、翼文曰順、膺文曰仁、背文曰義」とあつて前者の具體的に種々な動物の形體を擧げたのに對し、後者は抽象的な觀念を結びつけてゐる。そのやうな思想は緯書の論語緯摘襄聖には「鳳有文象、一曰頭象天、二曰目象日、三曰背象月、四曰翼象風、五曰足象地、六曰尾象緯」など、極端に現はされてゐる。かゝる記事はいふ迄もなく種々な思想で潤色されたものであつて、決して original な形態を示すものであるまいとは容易に推量せられるところである。そこで私は進んで他に鳳凰の原形を推知せしめるに足るやうな記事は無からうかと注意したのであつたが、かゝる問題はその性質上、その委細を上代の文獻に徵することは至難であり、且つ檢索し得るものは概ね鳳凰の屬性が既に或る程度まで發達した後に出來た記錄であるため、所要の史料は極めて乏しいのであるが、然もなほ考察を試みた結果、鳳凰は大鳥であつて羽毛が五采で美しいとせられてゐたことが推知せられたのである。

かの後漢書光武本紀の建武十七年冬十月の條には「有鳳皇見於潁川中陝縣」とあるが、東漢觀記(一卷)に依ると、此の時に「鳳凰五、高八尺九寸、毛羽五采、集潁川、群鳥從之」と云つてある。又た同じく後漢書の桓帝本紀建和元年十一月の條に「濟陰言有五色大鳥見于己」とあるが、かゝる記述はそれが鳳凰であるか否か明瞭にし難い。然るに三國志吳志の孫亮傳には「建興二年十一月有大鳥五、見於春申、明年改元五鳳」とあり、五鳳と改元されてゐるのを見るとその大鳥は鳳と考へられたものに相違なく、晉書の五行志にはこれを「建興二年十一月、有大鳥五見於春申、吳人以爲鳳皇、明年改元五鳳」と述べてある。又た宋書符瑞志、宋の文帝の條に「元嘉十四年三月丙申大鳥

二集秣陵民王顗園中李樹上、大如孔雀、頭足小高、毛羽鮮明、文采五色……揚州刺史彭城王義康以聞、改鳥所集永昌里曰鳳凰里」とある。又た唐書の張薦傳に「夢紫文大鳥成文止其庭、大父曰吾聞五色赤文鳳也」などあるのも以上述べたものゝ類例とせられよう。これ等の事實から鳳凰に大鳥が聯想されてゐたことは殆んど明瞭な事實となつたが、それと共に毛羽五采とか五色とか、文采とかと云つて美麗な鳥であることが說かれてゐる。而してその點に着眼すると、說文に「鳳神鳥五色備」とあるのが注意せられると共に、山海經の南山經に「有鳥焉、其狀如雞、五采而文、名曰鳳凰」とあり、大荒西經に「北狄之國有五彩鳥三、名一曰皇鳥、一曰鸞鳥、一曰鳳鳥」とあるのなどが考慮に上つて來る。又た黃憲の外史卷五上林に「有五色鳥集于上林、秦王喜而問曰、寡人享西土之祿、未有功德於敝邑之百姓、而致禽、寡人以爲鳳也」とあるのや、三國志吳志に「大元元年有鳥集苑中、似鷹高足長尾羽五色、咸以爲鳳凰」とあるものなども無論かゝる記事にありがちな或る部分の潤色や誇張はあらうが、五色に美麗な鳥が鳳と考へられてゐたといふ點は概ね一致してゐると信ずる。かかる資料に基いて私は鳳凰は大鳥であつて羽毛が五采で美麗なものとせられてゐたらうと推察を敢てしたのである。

かくて、更に考察を進め、文字の檢討を試み、その得た結果を綜合してこれを遺物に照し、その間に矛盾の生ずることなく、多くの一致點が見出し得たならば、先づこの推考は當を得たものと考へてよからうと思ふが、私の考察はこれらの點に就いて大體一致するやう思はれるから、以下順次それらの諸點を明かにしてみよう。

以上考察を試み來つたところに據つて、既に或は鳳といひ、或は鳳皇といひ或は鳳凰に作られる場合のあつた事は自ら明かになつたが、爾雅の釋鳥を見

ると「鷗鳳其雌皇」とあつて雄と雌とが區別されたやうに記してあり、張華の禽經などにも明瞭に「鳳雄凰雌」と云つてある。故に西人は嘗て鳳凰を Phoenix

第一圖　鳳碑

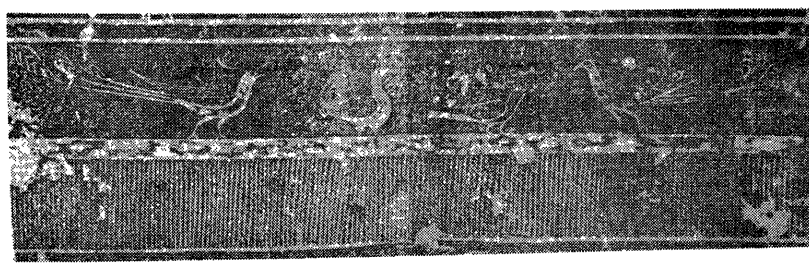
male and female とも譯したのであらう。要するに皇或は凰は鳳に附隨するものに過ぎず恐らくその原形は鳳であつたに相違ない。そこで鳳の文字を考へてみるのに、說文には鳳の古文として「籀古文鳳象形」又た「籀古文鳳」[23]とあり、就中その籀は鵬で、これは大鳥である。莊子に「大不知其幾千里」と云はれたのも本來これが大鳥とせられてゐたところに由來する空想であらうかと思はれる。かく考へて來ると、本來この文字は大鳥に聯關するところがあると共に、鳳は鐘鼎古文では籀に作られてゐる。かの高田忠周氏の著作、漢字詳解、漢字系譜講義を見ると「按ずるに朋は長尾禽なり、元と當に籀に作る」[24]とあつて羽や尾に注意された事も明かである。卽ち文字考察の結果、鳳の文字と密接なる關係ある鵬が既に大鳥を示し、籀で羽翼が注意されてゐる以上、鳳も亦た同樣であると考へられ、文字考察の結果も羽毛の美麗といふ點が記錄から得られる結果のやうに明かではないが大

鳥なる點、羽毛に注意された點に於いて極めて自然に合致すると云つてよからう。

併し既述の諸點のみを以つて滿足するのは聊か早計に失する憾があるから、更に進んで一應遺物に如何に現はされてゐるかを考究する要がある。元來鳳と云へばたゞちに fabulous な鳥を思ひ出すのであつて、後漢のものと推定されるかの鳳碑[25]（第一圖）の鳳の如き形態をその代表的なものと云つてよからうと思ふ。なほ形態に於いて殆んど全く鳳碑のものと相等しい四川省渠縣所在沈府君神道闕の如きを如何に考ふべきかについては、鳳と朱鳥との關係に關する問題となつて遽に決し難いであらうが、大村西崖氏の如きは「四川渠縣に漢謁者北屯司馬左都侯新豊令交阯都尉沈府君神道闕あり、兩闕共に上に朱鳥を刻し、右闕は下に龜蛇を刻し、左闕は下に一獸首を刻す[26]」と朱鳥として居られ、Osvald Siren 氏はその圖錄に Le Phénix (fong)[27] と認定して居られる。私は鳳と朱鳥との關係についての問題は遠からず論考を試みようと期してゐる四神の考察に讓るとして、兎も角沈府君神道闕上部の鳥は鳳の問題に有力な參考となるものと信じ、今その形態の fabulous なるに注意して置く。併し、此の種の形態は概して想像的分子を豊かに附加された後のものと考へられ、古記錄の記載が既に原形が何であつたか分明し難いほどに發達した後の形に過ぎないのと同樣であ

第二圖　鳳凰石刻（シャヴァンヌ氏圖錄に據る）

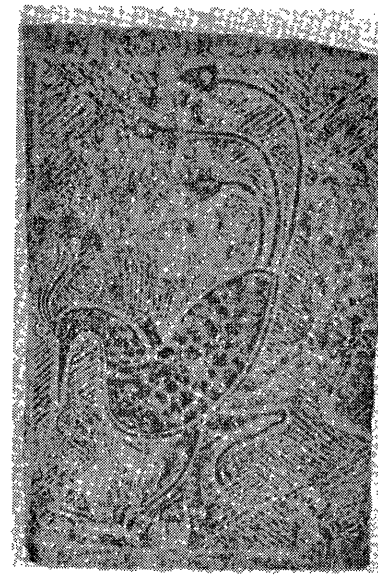
る。然るにCHAVANNES氏がMission Archéologique dans la Chine Septentrionale のNo 165にPhénix（第二圖）として掲げた鳳凰刻石には明瞭に鳳皇と記してあるし、かの漢の山陽麟鳳碑の鳥の下には「天有奇鳥、名曰鳳皇（下略）」とあつて、共に漢代の人々が鳳凰を如何なる形態のものとしてゐたかを知る貴重な資料である。前者はその手法概して幼稚であつて精細にその形態を窺ふには足らぬが、頭上に冠羽があり尾羽甚だ長いことが注意せられるし、後者はその手法やゝ精妙に渉り、一見所謂孔雀（Peacock, *Pavo Cristatus*）を思はしめ、兩者を綜括して、それが所謂孔雀を畫いたものであらうとは何人にも首肯せらるゝところである。かく考察を試みると、この二種の遺物から私は鳳凰の由來の尠くとも重要なる分子は所謂孔雀に負つたのではあるまいかと思爲せられ、然も上に考察し來つた鳳なるものが大鳥なること、羽翼の美麗なることゝの特に注意されてゐるといふ事と何等の抵觸する所のないのみならず、却つて逆に所謂孔雀にその重要な由來があつたればこそ、大鳥なること、羽翼の美しいことが特に注意されたのであつたかとも考へられる。



第三圖　孝堂山西間後壁畫象（シャヴァンヌ氏圖錄に據る）

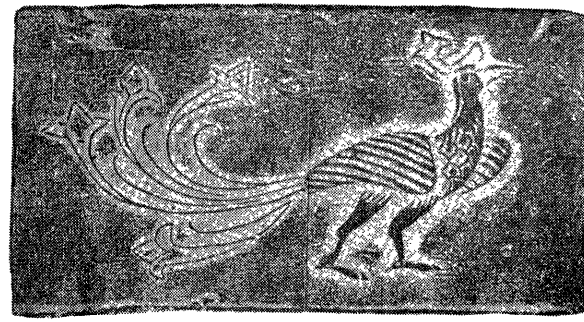
こゝに私は一轉して、支那の古記錄に現はれてゐる孔雀がPeacockであるか否かといふ事を一應考究して置きたいと思ふ。卽ち、漢書卷九十五、西南夷傳を見ると「謹北面因

使者獻白璧一雙翠鳥千(中略)孔雀二雙」とあるし、卷九十六、西域傳罽賓國の條には「出封牛水牛象大狗沐猴孔爵」とあつて、これに對して王先謙は「御覽引魏文帝與朝臣詔曰、前于闐王所上孔雀、尾萬、枝文采五色、罽賓進于闐、故亦有之、今回彊有孔雀」と注してゐて、Peacock と思はれる。併し雀は說文に依ると鳳であつて、雀は「鳥之短尾總名也」とあり、後世の如く雀を意味するものでなく、單に鳥なのであるのみならず、朱鳥を一に朱雀とも云ひ、古の文獻に往往青鳥黃雀などいふやうな用例のあるのを見てもただちにその然るを覺り得るのである。なほ孔は孔道などいふ場合の孔と同じく大を意味する事を併せ考へると、孔雀は大鳥と同義とも考へられ、漢書西域傳、烏弋山離國の條にある「有大鳥卵如甕」の大鳥や、或は西域傳卷末の論贊にある「鉅象師子猛犬大雀之羣食於外囿」の大雀などゝ特に區別すべからざるものゝやうに思はれ、記錄の上のみからでは所謂孔雀を以つて Peacock とは斷じ難いのである。然らば、上代の支那人は Peacock を知らなかつたかといふと決してさうではなく畫象石に明瞭にその圖があつて、Peacock は相當知悉されてゐたものと推察される。かの孝堂山の畫象に見る樓屋上の一對の如き(第三圖)、武梁祠の同樣な圖樣の如き、Adolf Fischer 氏が伯林に齎したといふ畫象の屋上のもの亦た同樣である



第四圖　泰室廟闕畫像

し、泰室廟闕畫象(註)(第四圖)のものは寫實の妙を現はし、皆星玉を持つてゐて何れもPeacockそのものに疑ひはない。それのみならず四神鏡の朱鳥には、全くPeacockの形を彷彿たらしめるものがあり、羅振玉氏が古明器圖錄に掲げた漢竈四側、玄武の對側の朱鳥(第五圖)の如きも明らかにPeacockであつて、漢代に所謂孔雀がよく知られてゐたことは寸毫も怪しむ餘地はない。



第五圖　漢　竈　(四側の内)

元來此のPeacock (*Pavo Cristatus*) の產地は、印度本土及び錫崙地方を主とし、*Pavo Muticus* と稱する種族は印度支那地方及び爪哇方面に產し、その性質は概して怯怕性に富み、よく馳走するけれども容易に飛ばず、小群を爲して生棲するものであり、何時の頃からかは不明であるが、飼鳥としても養はれてゐる。而して、印度支那地方の如きは支那に隣接する地域ではあり、古代の支那人が、Peacockを知つてゐたらうといふ事はほゞ明瞭となつた。かく考へて來て初めて後世の事實と照合して古に孔雀と稱せられたのは、Peacockであつたらうといふことも推知せられると共に、鳳凰には後世種々の屬性が附加され、樣々な潤色を經てゐるけれども、その根原的な由來と爲つたものは孔雀の大鳥にして他の鳥類に比すべきもの無きばかりにその羽翼の美麗であつたといふ事にあつたと推定せられる。

これを要するに私は以上の論考を經た結果 GILES

氏の鳳凰の由來を Peacock にあるとした說に贊意を表するのであるが、孔雀は何人の眼にもその羽翼の美麗なことが認められ、稀に見る立派な鳥であるから、それが古に普通ならぬ立派な鳥として終に祥瑞とせられるに至り、祥瑞は仁君の代に現はれるものであるから、それから轉じて仁鳥ともなり、生成を愛する屬性も附加せられ、ついでかゝる特殊な鳥は羽族の長と考へられて群鳥を從へるといふ事にまで發達し、層一層複雜な性質となるに至つて、古文獻に往々にして見る鳳凰の完備した性質形態が現はれるに至つたものであらうと私は信ずるのである。

（昭和六年一月八日稿了）

註

(1) 東洋學報第拾七卷第二號、二八二—二九八頁參照。
(2) 立敎大學史學會、史苑第三卷第四號二八九—三一三頁、支那の古文獻に現はるゝ麒麟について。
(3) 前漢書卷八、神爵二年……正月乙丑鳳凰甘露降集京師。
(4) 同上、神爵四年春二月詔曰廼者鳳凰甘露降集京師嘉瑞、冬十一月鳳皇十一集杜陵。
(5) 同上、五鳳三年三月辛丑鸞鳳集長樂宮東闕。
(6) 同上、甘露三年春二月詔曰廼者鳳皇集新蔡。
(7) 後漢書卷一下、建武十七年冬十月有鳳皇見於潁川之郟縣。
(8) 後漢書卷三、元和二年已未鳳皇集肥城。
(9) 後漢書卷五、延光三年春二月戊子濟南上言鳳皇集棗縣丞霍收舍樹上、冬十月壬午新豐上言鳳皇集西界亭。
(10) 後漢書卷六、建和元年十一月濟陰言有五色大鳥見于巳氏。
(11) 後漢書卷八、光和四年秋七月河南言鳳皇見新城、羣鳥隨之。
(12) 三國志魏志卷二、文帝本紀延康元年八月石邑縣言鳳凰集、吳志卷二、黃武五年秋七月蒼梧言鳳凰見、黃龍元年夏四月夏口武昌並言黃龍鳳凰見、吳志卷三、建衡三年西苑言鳳凰集改明年元鳳凰。
(13) 晉書卷三、武帝本紀泰始元年十二月是月鳳凰六青龍二白龍一麒麟各一見於郡國、二年十二月是歲鳳凰六青龍十黃龍九麒麟各一見於郡國、五年五月辛卯朔鳳凰見於趙國。など皆その例である。
(14) 註3、6、11、參照。
(15) 宋書卷二八、符瑞志、宋武帝永初元年七月戊戌鳳凰見會稽山陰。周書卷五、武帝本紀天和二年秋七月辛丑梁州言上鳳凰集於樹羣鳥列侍以萬數。
(16) 東洋學報第拾六卷第三號四四一—四二六頁、拙稿、上代支那の日と月との說話について參照。
(17) James Legge, Chinese Classics, Vol. III. The Shoo-king. P. 88.
(18) Eduard Chavannes, Les Mémoires Historiques de Se-Ma Ts'ien Tome I, P. 90.

(㊀) 章鴻釗、三靈解、二十三枚裡。

(㊁) Mitteilungen des Seminars für orientalische Sprachen. Jahrgang VII. 1904. SS. 133-136.

(㊂) H. A. GILES, Adversaria Sinica. PP. 9-10.

(㊃) Thomas BULFINCH, Age of Fables. (Eveyman's Lib.) P. 319

(㊄) 段玉裁　說文解字注第四篇上參照。

(㊅) 高田忠周　漢字詳解、漢字系譜識義、三四〇頁。

(㊆) 大村西崖著　支那美術史彫塑篇四五頁。（第百一圖）「拓本平崎天眞君藏に鳳凰高二尺五寸三分あり、鐵冑と對せしもの か鳳形甚だ佳なり、所在を詳かにせず、刻文模倣甚だしと雖も記末に乙巳春の字見えたり。惟ふに和帝元興元年ならん」とある。

(㊇) 支那美術史彫塑篇六三頁。大村西崖氏の所說は以上のやうであるが、これを冑身の上部にあるから、朱鳥であると憶斷に云ひ切れないので、必ずしも玄武との外相對してゐるのでないから余は寧ろ鳳として大過ないのではないかと思ふ。

(㊈) Osvald SIREN, Histoire des arts anciens de la chine III. La Sculpture de l'epoque Han a l'epoque Ming. PL. 11. 13.

(㊉) 會津八一氏は私の此の考へに對して「文選西京賦に倥偬雙闕、大雀蹊跱。兩都賦に棲金爵。魏都賦、翥雀臨霄。以上の雀又は爵はいづれも sparrow にあらず、biad なるべし。尙は年號の金爵などいふのも參照を要す。そも〳〵生きたる鳳凰が翔飛して宮殿又は花林に集りたりや否やは知り易からざるもとにかく宮殿建築の屋上に人工の大鳥を裝飾として揭ぐる風が行はれ、ある場合にはその起源の說明のために鳳凰飛來の傳說を生じたることもあるべし。こゝのことは早稻田大學の講義にても述べしことゝなりて居り。又拙稿「法隆寺食堂天蓋考」中にも述べおきしことゝなり」と敎示せられた。

(㊋) E. CHAVANNES, Mission Archéologique. III. Chambrette du Hiao t'ang Chan. PL. XXIV, No 45 Partie occidentale de la Paroi du fond. 大村西崖、支那美術史彫塑篇附圖、第百十圖。

(㊌) E. CHAVANNES, *op. cit.* IV. Wou leang t'seu. PL. XL No 68 Pillier de l'ouest face sud du contrefort. *op. cit.* V. Monuments divers de l'époque des Han.

(㊍) CHAVANNES, *op. cit.* PL XCI. No 170. Bas reliefs rapportes á Berlin par Prof. M. Adolf FISCHER.

(㊎) CHAVANNES, *op. cit.* 1. Les piliers de Teng-fong hien. A. Pillier du T'ai-Che. PL. VII. No 11. Bas-relief (oiseau).
支那美術史彫塑篇、附圖第百五圖、泰安廟闕畫象。